

ユーゴスラヴィアにおけるエスノナショナリズム台頭の背景

原口 岳久
日本大学総合社会情報研究科

Backgrounds for the Rise of Ethno-nationalism in Yugoslavia

HARAGUCHI Takehisa
Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

After the World War II, people in Yugoslavia had an era of peace. However, after the death of Tito in 1980, the political situation in Yugoslavia became unstable. This country not only lost the charismatic leader but also faced a serious economic crisis. The socialist regime lost credibility with the people.

In such a situation ethno-nationalism began to rise. And in 1990, ethno-nationalists won the elections in all the Republics.

This paper points out backgrounds for the rise of ethno-nationalism in Yugoslavia. Whereas a wealthy life is a basic desire of each individual, economic problems became the trigger of ethno-nationalism in this country. When an individual regards his/her ethnic group as the most basic community for him/her, he/she tends to regard an economic problem as an ethnic issue.

はじめに

ユーゴスラヴィアは第一次大戦後の1918年、南スラヴ人(バルカン半島に住むスラヴ人)の国家として誕生した。その後第二次大戦中にはヒトラーに占領され、住民同士の虐殺という悲劇もあった。しかし戦後はチトー(Tito)により統合され、人々は平和裏に暮らしていた。

ユーゴの政治において雲行きが怪しくなってきたのは、チトーが死去した1980年以降である。カリスマ的指導者を失ったばかりでなく、経済危機に見舞われ、ユーゴの国情は不安定化した。国是であった社会主義も信頼を失い、政治的空白が生じた。そこに台頭したのがエスノナショナリストである。彼らはメディアや集会でさかんにエスノナショナリズム

(1)のプロパガンダを行った。結果として1990年の選挙において、彼らは各地で勝利したのである。

エスノナショナリストが権力を握った以上、国内に多数のエスニック集団を抱えるユーゴがそのままの姿で存続できるはずはなかった。1991年以降、最初にスロヴェニアとクロアチアが、次いでマケドニアが、最後にボスニア・ヘルツェゴヴィナがユーゴから分離独立した。その結果1992年、ユーゴは74年の歴史の幕を閉じたのである。

ユーゴ崩壊に伴い、まずクロアチアで、その後ボスニア・ヘルツェゴヴィナで激しい内戦が生じた。それは独立を推し進める政府と、独立に反対する反政府勢力との間で戦われたのであった。これによって一般市民も大きな被害を被った。内戦による死者は20万以上とも言われている。

ユーゴの悲劇について考えるとき、ユーゴにおいてエスノナショナリズムがいかに台頭したのかという問いが生ずる。もちろん、チトーの死と社会主義の凋落による政治的空白のなか、エスノナショナリストのプロパガンダが成功したということが大筋である。しかし、ユーゴで行われたようないわゆる極右的なプロパガンダは他国においても珍しいものではないけれども、それが広範な支持を得ることは稀なのである。

なぜユーゴにおいてエスノナショナリズムは多くの支持を得ることができたのであろうか。この点を理解するには、エスノナショナリズム台頭の背景を知る必要がある。

本稿においては、まず、エスノナショナリズムのような集団行動がいかなる原理によって生ずるのかを考える。この点についてはハンガリー出身の政治学者ダヴ・ローネン(Dov Ronen)から多くの示唆を得ている⁽ⁱⁱ⁾。次に、集団行動の原理をふまえて、ユーゴにおける経済問題とエスノナショナリズムの関係について考察する。さらに、人々がなにゆえエスニック集団を通じてその希求を実現しようとするのかについて考える。

1 集団行動の原理

人は「自由」を求めるものである。心理的には自由が重荷になることもあるけれども、他人に束縛されることは誰にとっても望ましいことではない。奴隷や農奴の解放をはじめ、歴史的にも人間社会は個人を自由にする方向に進んできた。

また人は「良い生活」を求めるものである。良い生活とはあいまいな言葉であるけれども、まずは物質的に満たされていることである。歴史的にも人間社会は人々に物質的豊かさをもたらす方向に進んできた。

すなわち個人は自由と良い生活を求める⁽ⁱⁱⁱ⁾。そのために日々の活動や仕事がある。場合によってはそのために他の個人や何らかの集団と対立し、争うこともある。

個人は、自由や良い生活を求めて1人で努力し続けることもできる。しかし他人と協力し、集団で行

動した方が目的を達しやすいこともある。人は多くの場面において、集団で行動することによって自由や良い生活を獲得しようとしている。

その1つの例が労働運動である。ある会社で働く個人が、過酷な労働条件に大きな不満を持っていたとする。彼は1人で会社の経営者に待遇改善を求めることはできる。しかし経営者が冷淡な場合、彼の要求ははねつけられてしまう可能性が高い。しかしもし同じ会社で働くすべての労働者が彼と同じような不満を持っていたとしたら、労働者は結束して集団で経営者と交渉することもできる。その場合経営者は何らかの譲歩をする可能性が高くなる。

しかしその会社の労働者が集団で交渉したとしても、街に失業者が溢れており、どのような条件でも働きたいという人がいくらでもいたとしたらどうだろうか。経営者は反抗的な労働者全員を解雇し、新しい労働者を雇い入れるかもしれない。多くの経営者が労働者の弱みにつけこんで好き勝手をしているとすれば、1つの会社の労働者のみが結束するのではなく、その国の労働者全体が結束して経営者層と交渉することが考えられる。

あるいはその国に少数派の人種が存在しており、彼らがとくに就業において不利な状況におかれているとしたらどうだろうか。この場合は少数派人種の人々が結束し、人種差別をなくすよう経営者層や政府に訴えることになるだろう。個人の力ではどうにもならないからである。

このように自由や良い生活を追求する個人は、その手段として、集団による行動という方法をしばしば選択する。この点に関し、次の3つのことを指摘したい。

第1に、「集団が存在すること」と「集団として行動すること」の違いである。集団はただ存在するだけでは世の中を変えることはできない。集団として何らかの行動を起こし、世の中に対して働きかけることによって、状況を変えることができる。先の例について言えば、少数派人種という集団は常に存在していた。しかし彼らが結束して交渉を行うことにより、それははじめて状況を変える力を持つのである。

第2に、集団が行動を起こすには、リーダーシッ

プが必要ということである。集団の多くの成員が心のうちに同じような不満や願望を持っていたとしても、それを統一的な行動へと昇華させるには、成員をまとめあげ、牽引する指導者が必要である。あるいは指導者が、成員に何らかの思想を吹き込み、彼らに新たな願望を持たせ、行動を起こさせることもある。

第3に、集団行動の根源にあるのは、自由や良い生活に対する個人の希求であるということである。従って集団そのものは基本的には手段であるに過ぎない。ただし現実には集団のなかでの規範が強まり、個人が集団にがんじがらめにされる、あるいは集団が自己目的化してしまうことも多い。しかしそれは本来個人が意図したことではない。個人の希求と調和しない集団は、いずれその成員から離反されるであろう。また一時個人にとって大きな意味をもった集団も、状況の変化とともに、その意義を薄れさせていくこともあり得る。その集団を通じて追求されていた個人の願望が達成された場合などである。

2 経済問題とエスノナショナリズム

(1) 重層的集団

以上に述べたような集団行動の原理をふまえつつ、ユーゴにおける経済問題とエスノナショナリズムの関係について考えてみたい。

1918年、ユーゴは南スラヴ人^(iv)の国家という建前で建国された。他方ユーゴの人々のなかにはセルビア人、クロアチア人といったエスニック集団が厳然と存在していた。ユーゴの政界においてはこれらエスニック集団間の対立が建国直後から表面化した。第二次大戦中は、ナチスの政策にもとづきクロアチア人がセルビア人を虐殺し、セルビア人も報復を行うという悲劇があった。対独レジスタンスであるパルチザンのもと、ユーゴの人々はようやく結束した。

戦後はパルチザン伝説、チトーのカリスマ性、エスニック集団を横断する社会主義イデオロギーなどがうまく噛み合い、ユーゴの人々は一体性を保つことができた。戦後まもなくチトーはスターリンと対立する。外部にこの強力な敵ができたことも、結果として人々がまとまる一因となった。

ここで注目したいのは、ユーゴにおいて集団が重層的に形成されたことである。すなわちセルビア人、クロアチア人といった伝統的なエスニック集団とユーゴという新しい国家が並立し、個人の心理はその狭間を行きかう。例えばクロアチア人は、建国当時は、セルビア人が自分たちの自由を脅かすと考え、クロアチア人として纏まってセルビア人に対抗した。しかし対独レジスタンスにおいては、あるいはスターリンによる侵攻が心配されたときには、自由を脅かすものはユーゴの外部にあり、ユーゴの人々は纏まってそれに対抗した。このように状況に応じて、どの集団を通じた行動が個人の死活的利益に関わるかが変わってくるのである。

(2) 「クロアチアの春」

こうして戦後ユーゴの人々はチトーのもとに纏まりを見せた。ところが1970年に、ユーゴの一体性を揺るがすような事件が起こる。

1970年から71年にかけてクロアチア共産主義者同盟(共産党)の改革派、エスノナショナリスト的知識人、学生が加わって「マス・ポク(大衆運動)」と呼ばれる運動を展開した。これは連邦政府に対し、クロアチア共和国政府が経済計画、予算、税制などを自由に決定できる権利を求めたものである。この運動は「プラハの春」をもじって「クロアチアの春」とも呼ばれた。ついには連邦からの独立の要求までもが叫ばれた。

マス・ポクの直接的動機はクロアチア人の経済的不満であった。クロアチアはスロヴェニアと並んでユーゴの経済先進地域であり、所得、外貨の稼ぎ頭であった。しかしその多くは連邦政府に吸い上げられ、貧しい地域への援助に回されていた。

国土の均衡ある発展を図るためとすれば、連邦の政策は理解できる。しかしクロアチア人のなかには、自らの富が連邦に奪われていると感じる者がいた。このためクロアチア人はマス・ポクを組織したのである。

戦後目立った政治的行動は起こしてこなかったクロアチア人というエスニック集団が、経済的利益の確保を目的として行動を起こしたのである。その根底にあるのは個人の損得勘定であると言える。

(3) コソヴォ問題

「クロアチアの春」は、チトーが、クロアチア共産主義者同盟の改革派中心の指導部を刷新するなどして押え込んだ。しかしチトーの没後、さらに困難な事態がコソヴォの地に訪れる。

セルビア共和国の中にあるコソヴォ自治州は、ユーゴで最も貧しい地域であった。人口の多くをアルバニア人が占め(78%)、セルビア人は少数派(13%)であった。81年、アルバニア人が経済的不満から暴動を起こし、コソヴォの共和国への昇格を求めた。この事件の後アルバニア人が、支配層と目されるセルビア人を敵視するようになった。

他方ベオグラードからコソヴォに送り込まれたセルビア共産主義者同盟の幹部スロボダン・ミロシェヴィッチ(Slobodan Milosevic)は、アルバニア人に敵視されているコソヴォのセルビア人を守ることを主張し、セルビア人の間で人気を博した。またミロシェヴィッチはエスノナショナリズムのプロパガンダをさかんに言い、民衆を扇動した。この路線を推し進めることで彼はセルビア共和国の権力を掌握していく。そして89年には共和国憲法を改正し、アルバニア人の希望とは逆に、コソヴォ自治州の権限を大幅に縮小してしまった。当然これはアルバニア人の激しい怒りを買った。

このコソヴォ問題については、ユーゴにおけるエスノナショナリズム台頭という文脈において、次の3点が重要である。

第1に、「クロアチアの春」と同じく、経済問題がエスノナショナリズムの契機となったことである。クロアチアの場合は自らの富が連邦に吸い上げられているという言わば富者の不満であったのに対し、コソヴォの場合はその貧しさゆえに暴動を起こしたのであった。

第2に、アルバニア人のエスノナショナリズムの高まりが、セルビア人のエスノナショナリズムを活性化させたことである。端的に言えば、ミロシェヴィッチの「出世」は、コソヴォのアルバニア人のエスノナショナリズムに負っている。アルバニア人がセルビア人を敵視しているという状況があったからこそ、ミロシェヴィッチは自らをセルビア人の「英

雄」に仕立て上げることができたのである。

第3に、アルバニア人のエスノナショナリズムによって火をつけられたセルビア人のエスノナショナリズムが、返す刀でアルバニア人の抑圧に動き、それがまたアルバニア人の怒りを増幅させたことである。セルビア人とアルバニア人は対立激化のスパイラルに投げ込まれたのであった。

(4) スロヴェニア人のエスノナショナリズム

ユーゴで最大の人口を持つセルビア人のなかでエスノナショナリズムが高まっていること、およびミロシェヴィッチがコソヴォのアルバニア人に対して強硬な姿勢を取っていることは、他のエスニック集団の警戒心を呼び起こした。そして共和国の連邦離脱の動きが始まる。この点で先頭を切ったのはスロヴェニアであった。

スロヴェニアはユーゴで最も豊かな地域であった。1人当たりの国民総生産はユーゴで1位であり、最も貧しいコソヴォの8倍以上であった。そのためクロアチア人同様、自らの富が連邦を通じて貧しい地域に吸い取られているという不満を感じていた。さらに連邦政府が、経済危機に対処する目的で連邦の権限を強化する方向に動いていたため、経済に関する権限を確保したいという意図から、独立への志向が高まった。

またスロヴェニア人はセルビアを敵視し、セルビアによるコソヴォへの強硬策を激しく非難した。

90年1月のユーゴスラヴィア共産主義者同盟臨時大会においてスロヴェニア代表団は、党組織を分権化する改革案を提出した。そしてそれが否決されると全員会場から退出してしまった。これによって共産主義者同盟は分裂状態となった。

90年末の国民投票では、有権者の多くが連邦からの分離を支持した。そして91年6月スロヴェニアはユーゴからの独立を宣言したのである。

(5) 経済問題とユーゴ崩壊

スロヴェニアと同じ日にクロアチアも独立を宣言し、それにマケドニア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナが続き、まるでドミノ倒しのようにユーゴは崩壊していった。このユーゴ崩壊の過程に関し、経済問

題とエスノナショナリズムに着目し、次の2点を指摘したい。

第1に、戦後のユーゴにおける初の分離運動となった「クロアチアの春」、ユーゴ崩壊への過程の始まりとなったコソヴォ問題、分離独立の先頭に立ったスロヴェニア人のエスノナショナリズムのいずれもが、経済問題をきっかけとしていることである。このことは、経済的不満がエスノナショナリズムを生み出す有力な要因であることを示している。

これを集団行動の原理と照らし合わせてみると、良い生活に対する個人の希求が、エスノナショナリズム運動という集団行動を通じて表現されたと言える。個人の極めて基本的な欲求が根底にあったため、ユーゴのエスノナショナリズムは力を持ったと言える。

第2に、経済に関する不満が、アルバニア人という経済的弱者と、クロアチア人およびスロヴェニア人という経済的強者の両方から出されていたことである。前者は現下の体制を自らの貧しさの原因とみなし、後者は現下の体制を自らの富を不当に収奪するものとみなす。そして後者の富は連邦を通じ前者の援助に回されていたのである。すなわち両者の利害は相反していたのであり、双方を満足させることは所詮不可能であった。

ユーゴ全体で見ると、北の2つの共和国(スロヴェニア、クロアチア)はより豊かであり、その他の南の共和国はより貧しかった。この「南北問題」によってユーゴは引き裂かれたと見ることもできる。

3 なぜエスニック集団か

(1) エスニック集団という選択

これまで、自由や良い生活に対する個人の基本的な希求が集団行動の基礎であること、ユーゴにおけるエスノナショナリズムの台頭においては「良い生活」にかかわる経済問題がきっかけになっていることを述べた。

しかしこれだけではエスノナショナリズム台頭の背景説明として十分でない。なぜなら経済状況改善の手段はエスノナショナリズムだけではないからである。

自らの経済状況を改善するため個人が集団を作って行動することは理解できる。しかしその集団がなぜエスニック集団になるのであろうか。失業や貧困が問題であれば、エスニックの背景を問わず労働者層で団結することもできる。あるいは一定の地域に住む人々が手を結ぶこともできる。ユーゴにおいて経済問題は地域の問題(先述の「南北問題」)だったからである。しかし現実において強調されたのはエスニック集団であった。

さらに現下の国家から分離独立することは、経済問題を解決することを必ずしも保障しない。とくに最貧地域であるコソヴォは、独立したとしても、経済的に自立できるとは考えにくい。スロヴェニアやクロアチアも、独立によって、自らが生み出す富を自由に処分できるようになるけれども、同時に従来の国内市場を大幅に失うことになる。

集団行動の単位としてエスニック集団が選択されたことで、共和国によって異なる結果が生ずることとなった。スロヴェニアは幸運であった。同国では人口の91%がスロヴェニア人であったため、独立後に内部でエスニック集団間の対立が生ずることはなかった。結果としてスロヴェニアは、わずか10日ほど連邦軍と小競り合いを行っただけであった。

しかし人口の12%のセルビア人を抱えるクロアチアではそうは行かなかった。クロアチア人のエスノナショナリズムにもとづく独立に対し、セルビア人は大きな懸念を持ち、抵抗したのである。そのため激しい内戦が生ずることとなった。

コソヴォも同様である。アルバニア人が多数派(78%)であったとはいえ、そこには13%のセルビア人が住んでいた。しかもコソヴォはセルビア人の揺籃の地と考えられていた(中世のセルビア王国の首都が位置していたため。その後オスマン帝国の進攻とともに多くのセルビア人がこの地を去った)。コソヴォが独立することなどセルビア人のエスノナショナリストには考えられなかったのである。結果としてこの地においてはセルビア人とアルバニア人の悲惨な紛争が長く続くこととなった。

このように、経済的不満をエスノナショナリズムに結びつけたことで、ユーゴは紛争への道へ踏み出していったのである。「なぜエスニック集団か」は重

要な問いである。

(2) 個人の基盤となる集団

結論から言えば、経済的不満がエスノナショナリズムに結び付いたのは、エスニック集団が個人にとって「基盤となる共同体」と認識されていたからだと考えられる。

個人は通常、自分の基盤となる共同体を欲する。それは個人のアイデンティティの基盤となり、心のよりどころとなるような共同体である。そのような共同体を持つことで、個人は自分が「根無し草」ではなく、孤独でもないと感じることができる。このような感覚を持つことは、個人の心の安定のために重要であるように思われる。

エスニック集団は「基盤となる共同体」になり得るものである。人は、人種、言語、文化、歴史、宗教などを同じくする相手に自然と親近感を覚える。同じ仲間だと感じることができる。より信用できるような気がする。たとえ親戚でなくとも、どこかで血がつながっているのではないかと思うことも可能である。

「基盤となる共同体」の座をめぐりエスニック集団のライバルになり得るものに国家がある。ユーゴの人々にとっては、ユーゴスラヴィアとエスニック集団が選択肢であった。1980年代においては、チトーの死と(経済危機による)社会主義への信頼喪失のなか、ユーゴの求心力は弱体化していた。そこにエスノナショナリストのプロパガンダが行われ、エスニック集団が「基盤となる共同体」としての地位を固めていったと言える。

エスニック集団が「基盤となる共同体」である場合、個人のなかで経済問題がエスニック集団と関連付けられる可能性は高いと思われる。とくに人々のなかで、論理的判断よりも、情緒的反応(支配的エスニック集団への反発など)が勝っている場合はそうであろう。

4 歴史的背景

「基盤となる共同体」となり得るものとして先にエスニック集団と国家をあげた。しかし中世に

おいては村落共同体がその地位を占めていた。また永遠不変に見えるエスニック集団も、歴史的には移り変わっている。最後にこれらの歴史的背景を見ておく。

中世においては、人口の多くを占めるのは農村部の人々であり、その多くは封建制度のもとにあった。彼らの行動範囲および彼らに入ってくる情報は限られたものであった。

この状況においては、個人の基盤となる集団は村落共同体であった。地縁、血縁にもとづく自然的な共同体、いわゆる「村」である。

近代に入り、工業化、都市化が進展するにつれ、状況は大きく変わってくる。封建制度が消えていく一方、都市が新たな就業機会を生み出す。多くの人々が農村部から都市部に移り住み、伝統的な村落共同体に住む人口の割合は減少していった。

しかし都市には、村落共同体に替わるほどの親密な地域共同体は存在しない。都市が孤独な場所と言われるゆえんである。

「基盤となる共同体」として村落共同体に替わり台頭してきたのがエスニック共同体である。エスニック共同体と村落共同体の大きな違いは、その規模にある。エスニック共同体は地理的範囲がはるかに広く、成員数がはるかに多い。いま1つの大きな違いは、成員が互いに顔見知りかどうかである。村落共同体においては、人々はたいてい互いの顔を知っている。しかしエスニック共同体においては、ほとんどの成員は互いに会ったことすらない。

「基盤としての共同体」としてエスニック集団が台頭した要因として、次の2点がある。

第1に、近代的コミュニケーション手段の発達である。すなわち通信、輸送、印刷技術の発達、およびそれにもなうマスコミや書物の普及である。これにより大量の情報を迅速に、広い地域の数多くの人々に届けられるようになった。これは広域における政治宣伝や標準的教育が容易になったことを意味する。

第2に、フランス革命を契機とし、19世紀のヨーロッパを中心に燃え上がったナショナリズムである。ナショナリズムに影響され、エスニック集団の指導者たちの多くは、自らの国家を作ろうと政治運動を

展開した。彼らは人々の集団意識を高めようと(近代的コミュニケーション手段を通じて)働きかけを行った。この過程を通じて、広域に住む多数の人々が、エスニック集団としての集団意識を高めたのである。

ナショナリズムの過程においてエスニック集団そのものも変容(拡大)していった。例えば今日のドイツは、18世紀まではいくつもの領邦国家に分かれていた。ドイツという単位の共同体はなかった。しかしナポレオンの占領に対する反発から、ドイツ人としての意識が形成されたのである^(v)。

セルビア人やクロアチア人は中世からエスニック集団として存在していた。しかしボスニア・ヘルツェゴヴィナに住むセルビア人とクロアチア人は別である。彼らは18世紀までは、ボスニアの正教徒あるいはカトリック教徒という意識しか持っていなかった。しかし19世紀、セルビアのセルビア人あるいはクロアチアのクロアチア人からの働きかけを受け、セルビア人あるいはクロアチア人という意識を持つようになったのである。

今日、個人にとっての「基盤となる共同体」は主として、ナショナリズムの成果たる国家、あるいは独自の国家を持つことができなかったエスニック集団である。多くのエスニック集団は、少数派として国家に組み込まれているけども、「基盤となる共同体」としての生命力を保ち続けている。1990年代以降ユーゴやその他の地域で噴出したエスノナショナリズムは、そのようなエスニック集団が何らかのきっかけで行動を起こした結果なのである。

おわりに

ユーゴにおけるエスノナショナリズム台頭の背景に関して、本稿では次の4点を指摘した。まず、人間の集団行動の根底には「自由」や「良い生活」に対する個人の希求があること。「良い生活」にかかわる経済問題がエスノナショナリズム台頭のきっかけになっていること。エスニック集団が個人の「基盤となる共同体」となっているとき、個人のなかで経済問題がエスニック集団と関連付けられること。そして、エスニック集団は歴史のなかで「基盤となる集団」としての地位を獲得してきたことである。

上記の点から見て、今後も当面、世界のどこかでエスノナショナリズムが台頭する可能性は常にある。多くの個人にとってエスニック集団が「基盤となる集団」である以上(それが変わる兆候は今のところ感じられない)、様々な問題がエスニック集団と関連付けられていく可能性があるからである。ユーゴのように異なるエスニック集団が混住している地域においては、エスノナショナリズムがエスニック集団を対立のスパイラルに投げ込み、武力紛争を引き起こさないよう、当事国および国際社会は手を尽くす必要がある。

なおユーゴにおいては、エスノナショナリズムが台頭しているときであっても、1つのエスニック集団のなかに様々な意見があったことを断っておきたい。エスニック集団の成員全員がエスノナショナリズム一色に染まったというわけではない。エスノナショナリストに投票する者のなかにも、エスノナショナリズムを能動的に支持する者と、受動的に容認する者がいた。この点についての分析は今後の課題としたい。

またエスノナショナリズムの台頭が必ず紛争を引き起こすわけではもちろんない。ユーゴにおいて権力を握ったエスノナショナリストたちがいかに紛争に突入していったかという点についても、今後分析していきたい。

⁽ⁱ⁾ 人種、言語、文化、歴史、宗教の全てあるいはいくつかを共有し、それを基盤として一定の集団意識を持つ人々のことをエスニック集団と呼ぶ。エスニック集団の自決権を主張し、政治的独立を獲得しようとする運動をエスノナショナリズムと呼ぶ。ダヴ・ローネン(浦野起央、信夫隆司訳)『自決とは何か』(刀水書房、1988年)を参考とした。

⁽ⁱⁱ⁾ ローネン『自決とは何か』を参照。

⁽ⁱⁱⁱ⁾ ローネンは『自決とは何か』において、自由と良い生活への個人の希求をあらゆる自決運動(ネイションの自決を求めたナショナリズム、労働者階級の自決を求めた階級闘争、人種の自決を求めた植民地解放闘争、エスニック集団の自決を求めるエスノナショナリズム)の根源であると主張している。本稿もこの見解に同意するものである。

^(iv) 「南スラヴ人」は19世紀のクロアチアの知識人により考案された集団概念である。しかしほとんどの人々は伝統的なエスニック集団のアイデンティティを保ち続けたため、南スラヴ人という集団意識が形成されることはなかった。

^(v) ローネンは、ナショナリズムの過程を通してドイツ人というエスニック集団が作られたと述べている。『自決とは何

か』 45 頁。

(Received: January 10, 2006)

(Issued in internet Edition: January 31, 2006)